31 特231
26
823

校長 海軍中將從三位勳二等功三級男爵 梨羽時起閣下

心身改造 靈動氣合術 氣合治療法 講義錄

第七篇

東京 大日本靈學通信學校

始

特231
823

心身靈造 靈動氣合術 氣合治療法 講義錄

大日本靈學通信學校講師講述

第七 神奇篇

緒言

本篇は名づくるに、神奇の二字を以つてしました。如何にも、神怪鬼變の奇術を說くかの樣に聞えますが、實は至極平凡な事を說いてあります。

元來靈眼が開け、靈智の哲らかな方に、神變奇怪なことは、一つだつてある譯は

ないのです。古諺に『正法に不思議なし。』と、言つてありますのは、全く此の謂なのです。然しながら心眼が深く閉ぢて居り、靈智の未だ開けてない方には、如何にも神變不可思議な、事と見られる樣なことを書きましたから、暫く神奇といふ語を借りて、本篇の名と致した次第です。

吾人は、其の根本の性質からして、己れの理智によつて、理解し得られたことは躬ら行ふ事が出來なくとも、之を平凡なこととし、道理に叶つた事として、何等の怪異を感じないし、理由理法は解らない迄も、二六時中見なれ、聞きなれ、アリフレた事とし、何の不思議をも感じません。更に自ら行ひ得る事になりますと、たとへどの樣な奇怪なことに對しても、少しの疑念を挾まないものです。之と反對に、自分の豫期しない事に對しては、尾花、薄のヲノノキにも、幽靈の怪を感じ、自己の理解を超越した事象に對しては、神異を以つて見、或は風伯雨師となし、或は鳴る神として、之を崇敬します。寔に今日の我等の知識を以つてしては、何等の神變奇怪を感じない電氣に關する諸現象、及び飛行機、潛水艇も、所謂未開野蠻の徒には如何にしても、之を理解せしめ難く、彼等は之等に對しても、驚駭と畏怖と、崇敬の念を以つて接するの外は何物もありません。帝都訪問の伊國飛行家が　中央亞細亞の蠻地に着陸した際の物語は、能く此の間の消息を傳へてゐます。斯樣に神奇といふも、畢竟は其の人と、時と、處とに依つて、天地の差異のあるものです。

斯の篇中に說く所も亦然りで、甲乙の所感、感得必ずしも一致いたさないと信じます。否な寧ろ各人の間に、徑程、軒輊の甚しいものがあらねばならぬと思ひます。

見る人の心心にまかせおきて
空には淸し秋の夜の月

右の古歌の意の樣に、同一事象、理法に對しても、之に對する各人の素養と、修養が違ふために、其の感知する所に差はあつても、客觀の秋の夜の月に相違のない樣に、本篇に述ぶる所に對して、神奇を感じ、驚異の眼をみはる者も、平凡なる事

として、一切を承認さるゝ者も、其の間に何等の差異なく、同樣に行はれ得る譯であります。

幸に諸子が、右の道理を感悟して、平凡な事として侮らず、何處迄も眞面目に不可思議事として驚畏せず、何處迄も熱心に、本篇に對せられることは、諸子が斯道の極致に達する便益のいよ〳〵饒いのみならず他日諸子が治療の上に應用し、或は處世の上に應用せられる點の、多いことと信じます。

上篇　不死身篇

古來不死身なる者は、生れ附の樣に考へてゐる者が多い、決してさうではなく全くは修養に依つて、誰人も容易に得られるものである。而して其修養法の如きも、昔から隨分いろ〳〵な法が案出され、傳へられてゐるが、何れも吾人が、別篇に於いてくわしく說示して置いた、六法の外には出ない。併かし此所には、全くの不死身になつて、諸種の奇現象を顯はし得るに至らない人にも、六法修行の傍ら吾人が示す注意の許に行なへば、何人にも容易に行ひ得るものを、かゝげることにしました。言ふ迄もなく、之を行ふ程度の深淺と、結果の良否とは、一つに修養修練に待たねばならぬことは、今茲に言ふ必要はあるまいと思ひます。

第一章　身肉に鐵針を挿して疼痛なきこと

之は誠にやさしい事で、下腹丹田に充分に力を罩め、全身の力を、唯この一部にあつめて、他の力を拔き、全く肉がグニヤ〳〵になつた時に、何事をも考へずに、唯スウート挿せばよいのである。と言つた許りでは、到底信じられないかもしれないが、醫師に注射される時のことを思へば、了解の出來ることと信ずる。

注意　(1)挿す場所は頰、腕、腿等肉の豐饒なる所を擇ぶべし。(2)肉に力を入れざる樣心すべし。(3)針は別に消毒の必要なし。(4)木綿針は細過ぎて折れ易し、忌

む。蒲團トジ針、靴針、ボンネット用ヘヤーピンや疊針等可なり。錐の太きものは痕迹を長く止めるが故に忌む。(5)拔き取る時は上層の肉を押へ、手早く拔くを可とす。拔きたる後は三四十秒の間、針穴を指頭にて押へ置くこと。

第二章　燭火能く肉身を燒かざること

之も想と力とを臍下に收めて、炎々たる燭火、大なる程よい。燭火に代ふるに、石油洋燈の火焰にてもよい。之を身體の如何なる部に觸れしめても、更に痛苦を感じ、火傷を生ずる事はない。其の甚しきに至つては、炎々たる燭火を、口中にし、口腔悉く火になつても、更にアツサを感じない。之も全く虛言の如な事實で、唯虛心平氣で行へば、即ち畏れずに行へばよいのです。初めには幾分アタタカ味位を感じますが、修養を積むに從つて、それもなくなります。

注意　(1)燭火を身體に近くスリツケル事が、尤も大切な秘傳とせられてゐる。

(2)火を一定の所に置かず、絕間なく之を動かすことは、更に大切な事である。

(3)口中に火を入れる時は、一思に挿入れ、口を恐ろし相に開かないで、唯外から口中の眞赤さが、見える程度に閉るがよい。

第三章　火渡護摩の法

此の法は、古來から所謂行者なる者に依つて、研究され、傳へられたもので、世人の多く知る所である。

法式は、方六尺の土地の表面を、深さ三四五寸堀り取り、海岸の白砂を以て、アトを埋め、更に鹽を散布し、以上の準備をなすを、行者達はお淸めと稱して、呪文を唱へ、九字の秘法を修し、森嚴なる儀式を以つてするのであるが、吾人は敢て其の必要を認めない。松薪を山と積み、兩端に濃厚なる鹽水をしませた俵を置き、準備いよ〳〵なると、薪に點火し、其の八九分通り燃えて、地に恐ろしき迄に炭火の

生じたる時、一端より他端まで、一氣に經文を唱へながら通り過ぎるのである。此の場合に於ても、決して經文の必要はない、大聲で磯節を歌つてもよいのである。

注意 (1)薪は必ず松、若しくは杉でなくてはならない。(2)少くも七分通り燃えたる後にする方が安全である。(3)必ずしも必要とはしないが、大聲をあげる方が都合がよい樣である。

第四章　握れる剃刀を拔きて傷つかざること

掌中に、トギスマシタル剃刀を握り、握り拳の上より帶又は手拭の類を卷きて、其の兩端を大の男子二人に持たしめて、力限り之を引かしめ、充分に拳の締りたるを見計ひて、曳と一聲の氣合諸共、剃刀を引拔くも、掌は聊かも傷けらるゝことなし。法は丹田に蓄へたる靈力を全身に傳へ、拳は初め握りたるまゝにて、左右より如何なる剛力によりて引かるとも、之に對しては無關心にて、我は無我の狀に居て唯引き拔けば可なり。

注意 (1)腹力未だ充分ならざる者は、隨分注意して之を行ふも、時に失敗をなすことがないでもないが、先づ剃刀は、掌に背に向け、刃を指先に向けて、掌に置き、之を軟かに握る。(2)布を拳に卷きて、左右より引く時は、全身に腹力を配して、之に抵抗すること。(3)氣合と共に、刀背にて掌を强くすりながら、輕く引き拔くこと。(4)斯くて刃先と掌面との間には空間を存すること。

第五章　鐵火を拔きて火傷せざること

鼎鑊甘きこと飴の如しとは、志士が其の所信を斷行するに當つて、王法の刑罰に觸れるも、敢て意に介せざる意氣を歌つたものであるが、倦まず、撓ゆまず、心身修練の六法を行ふて久しきに至れば、何人もよく、水に溺れず、火に燒けぬ不壞金剛の法體になるのである。此の理は本篇の序にも說いたが、封建の代、一禪僧が、

西國の某大名の忌に觸れて、灼熱せる鍋を被せられて、尙ほ平氣で自已の所信を高唱したと云ふ、實話が證してゐる所である。併しながら容易に至域には達し得られない。其處で所題の如き事に、一應の滿足をしようとするのである。

先づ細きは火箸の如きから初まつて、太きは握りに餘るやうな鐵棒を、眞赤にヤキ、未だヤケざる一端を左の手に握り、右手を以つて左手の上部を握り、曳の氣合と共に灼熱の鐵棒を、前方に扱く可し。言ふ迄もなく、臍下に力を藏し、氣合の滿つるを待ち、一氣に扱くのである。

注意　(1)丹田の力が、不充分であると恐が出で、力が身體の他部にも籠り、一氣に扱けなくて、怪氣をするから、氣をつけねばならぬ。(2)次第に灼熱部の長が增してもよいが、初は四五寸を程度とする。(3)餘り幾回も扱かないで、先づ五六回でやめるがよい。(4)鐵棒をたたけば、ペラ〳〵になつて、はげて落ちる樣な錆は、充分落して置くがよい、燒錆が手に附著して火傷することがある。

(5)氣合がくだけて、二段に扱くと必ず火傷するから、一氣に扱く稽古を冷い棒でして置くのも妙である。(6)棒が衣服に觸れない樣にしないと、觸ると直ぐ焦げるから大變である。(7)鐵棒は可及的、充分に熱しておいた方がよい。(8)一寸考へると、誠に恐しいことの樣であるが、堅炭の眞赤な火も、手でたゝいた丈けでは、決して火傷しないことを思つて、思ひ切つてやつて見るがよい。

第六章　熱湯を浴びて火傷せぬこと

古來所謂行者なる者が、行ひ來つた法式は、清淨なる水を汲み來り、之を煮沸して其の沸騰するに至れば、神前に捧げたる神饌を、釜の中に投じ、お淨めと稱して食鹽を投入し、激しく九字の秘法を修して、己れまづ笹の葉等にて熱湯をふりかけ次いで群れる信者等にふりかけるに、何等熱さを感じないのである。斯う書くと、如何にも神の守護によるか、九字の秘呪の妙力の勢の樣であるが、決してさうで

なく、唯行へば良いのである。

第七章　九字の祕法

九字の秘法は、古來兵家、道家、行者、山伏等の間に非常に神聖視され、大層重寶がられたものであるが、此の篇に述べる所とは、全く無關係である。しかし、既に第三章でも、第六章でも、偶々言及した所であるから、一通り説明することにした。だが此所には、全く其の形式を説くに止め、歴史や、效能は説かないことにする。唯諸子が、一意專念朝暮に之を修するならば、遂には刀印に依つて、岩石を切り、一聲の氣合と共に、空に拂ふ刀印の妙力に依つて、空高く枝張れる巨木の幾枝を切落すことも容易であると、古來から之を傳へるものゝ間に信じられてゐる。

法式　次に示す九つの文字、一つ一つに其の下に、説明した手印を結ぶのである。

臨　左を下に、小指、藥指、中指を左右交互に內側（指先が手背に出で、前手掌の方にある樣にする）に組み、人指を立て合せ、右の拇指を、左の拇指にて抑へる。斯く手印を結び臨と稱へながら、一振り振りて次印に移る。

兵　小指と、藥指とを內方に折り、左右の指背を合せ、人指を立て合せ、中指にてカラミ、拇指は左右併べ立て、中指の指端と、拇指の指端とを相接せしむ。

鬪　左の人指の端を、右の藥指と中指との間に置き、右の人指指を、左の藥指と中指との間に置き、中指を內方に折りて、左にて右の、右にて左の人指をからみ、小指、藥指、拇指を立て合はすべし。（拇指は耳となり、小指、藥指によりて口を作り、人指端は眼となりて、外向きの獅子を生ずべし、是れこの印に、外獅子印の名ある所以である。次の印は內獅子と名づけられてゐる。）

者　闘と向きの變つた印を造るのである。藥指端を、人指と、中指と間に按じ、中指にて、其の交叉をカラミ、拇指、人指、小指を立て合はすのである。

皆　左を下に、五指を順次に交互に外側（指が手背に表はれる樣）に組むのである。

陣　左を下に、五指を順次に、而して交互に內側に組むのである。此の印で、特に注意を要するのは、十指を殆んど、一處に集める樣な心持でやることである。

列　左の人指を立て、拇指端に中指、藥指、小指の各端を集め、掌を出來るだけ圓い虛にし、右手の五指の端は、左手で人指端を圍んで一處に集り、掌はなるたけ圓い空虛にするのである。

在　左右の拇指と拇指、人指と人指の各端を接して、圓い形を造り、他の六指は開き放して、放光の形とするのである。此の印相は、古來日輪放光印と名けられてゐる。その心で結ぶがよい。

前　右の手上に、左の拇指を圍む樣に、他の四指端を集め、掌は圓い空虛となりたるものを案じ、右の拇指は輕く內方に折り屈げて、左の手の爪と、右拇指の爪とが、相接する樣にする。

右に示す所に依つて、九字の印相を結んだならば、今度は前の印を結んだ儘『惡魔降伏、怨敵退散、七難消滅、七福速生秘呪』と稱へ、秘呪と唱ふると共に、息を氣合込めて、左掌の虛の中に吹き込み、直に印相を解き、刀印を結ぶ。

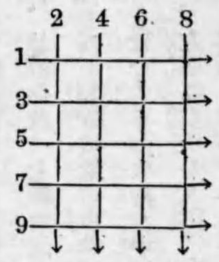
刀印とは、右手の人指、中指を併べ立て、藥指、小指を內方に折り、拇指にて之を押へ、左手は右手の人指、中指の併べ立てるを刀身と心得、鞘を造る心地にて之を握り、拇指は他の四指を押へる樣にする。

刀印を結びたる儘、丹田に十二分の腹力を堪へ、全身に將に顯動の發せんとする刹那、手力を拔き、左手の鞘は腰に案んじ、中空に九字の眞言を稱へつゝ、縱橫の

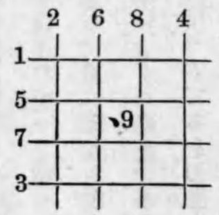
劃をなすこと三度に至るのである。

この縱横劃に秘傳があつて、次の三樣式が用ゐられてゐる。第一式普通形式。第二式惡魔惡靈封じの形式。第三式惡病、惡靈、惡魔拂ひの形式。

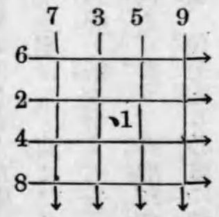
（第一式）



（第二式）



（第三式）



右何れの式にする多合も、一劃毎に一字を稱へ、必ず同樣のことを、三回繰り返して行ふ可きである。

出來るならば、水垢離を取つて、切るべきである。

第八章　早九字のこと

之は、古來多く兵法家の間に用ゐられたもので、九字に代るべきものとせられてあるが、特に獸類より來る邪靈、惡氣を防ぐために使はれた樣である。

法式としては、右手に刀手を結び、臍下丹田に心氣力を充實せしめ全身に將に顯動の生ぜんとする刹那、手刀を以つて『虎』の字を中空に描き、『我は虎、如何になくとも犬は狗、獅子のはがみに怖れこそすれ』と呪文を唱へ、更に充分に力に充ちた氣合を以つて、九字を劃するのである。此の場合の九字の劃し方は、右手を開き、指を伸べ、揃へたる儘『曳』と氣合を發しながら、上から下へ五線（指一本で一線を劃するものとする）を劃し、拇指を屈げて、他の四指を伸べ揃へ、左より右へ『矢』と氣合を發し、更に『當』の氣合を發心して、所謂殘心の心持ちでゐるのである。

所謂、殘心とは、兵家の言であつて、敵を切り、或は敵を投げたる後、尙ほ敵に注意を止め、心をゆるめぬことである。

（附言）　二章に亙つて印のことを說明したが、如何なる印契を結ぶにも、結ぶ人

の手が、次に言ふが如きことが出來ねば、完全な印想は得られないとしてある。

先づ左手を下に、右手を上に、手背と手背とを相接しさせ、小指と小指、人指と人指とを絡み合せ、左手の拇指を、右手の掌の方へ廻し、拇指と拇指と相接せしめる。之が出來さへすれば、如何なる印相も、完全を期し得るのである。斯う書くと筋肉、關節の硬化した老人や、筋肉勞働者は、一寸出來ないために、不可能なことを注文した樣に考へるであらうが、婦人、子供にやらせて見ると、容易にやり得るので、合點が行くことと思ふ。

× × × × ×

斯の篇に餘り關係が薄く、而も大方の人に信を置かれない、印契の事を説明したが、事實に於いて、印相其のもの、呪文其のものには、何の重大な意義も存してゐないかもしれない。實際古來傳つてゐる所によつても、九字の次ぎに『行』の一字を附加して、十字にやるやり方もあれば、印契の相の異つてゐる所もある。しかし之を事實の上に見た効能から言つて、何等の差異もない、尠くとも吾人の實驗から、之を確言し得る、點に徵しても、此の點は明瞭なことであるが、然し世の如何なる事も、同一內容を有しながら、形式を幾つにも變へるものがある。例之同じ禮をするにも、擧手の方法あり、拍手あり、握手あり、所謂お時宜なるものがある。甚しきに至つては、對者の足をなめ、或は大地に大の字形に打臥す形式さへもある。が併し何の形式をもぬきにしては、決して禮の意は表はれない樣に、必ず何等かの形式によらねば、意も、氣も、表はれるものでない。同じく形式をとるならば、古來から、尤も多く行はれて、最も多くの人に依つて認められる形式をとることが、最も賢明なやり方である。此の意に於て、上述の形式を練習されむことを切望する。

此所に説明した所に依つて、吾人の九字、其の他現在一部の人に依つて尊重せられてゐる呪文、加持、祈禱なるものに對する解釋、態度は、充分諒解されたことと信じるが、要は斯術の立場から見て、尤も完全な、心身の保有者の丹田、否全身か

ら流出する靈氣、其の者の力であると云ふのである。

斯の解釋を承認する人は、當然の順序として、心身の完全なる鍛錬、養成法たる別篇六法の何れをも修せざる、(特に吾人に就いて學ばずとも、冥合したる者は例外なり)者が如何に形式のみをまねたりとも、何等の効果もなきことをも、諒解して下さることと思ふ。希くは別篇を讀んで、至完な心身を得てもらひ度い。

第九章　沸騰せる湯を手に注ぎて飲むこと

一二三篇の各編を、不斷に修して、實に金剛不壞の心身になられた方には、斯樣なことは全く問題にならないのであるが、實は容易に斯の境地に到達することは、難事である。そこで、所謂山師なる者が、其等をよい事にして、無智なる方を欺いて、物理上當然なこと迄、如何にも神秘的に說いてゐるから、筆の序でに本書に依つて、同樣なことを眞面目に研究されんとする方が、欺かれない用心に、山師輩がする本章の方法をスツパぬいて見ませう。

沸騰は激しくしてゐても、サイダを飲んで火傷をせない人は、次の方法を理解して頂けると信ずる。

所謂山師の沸騰水なる者は、水に曹達＝炭酸曹達、又は重炭酸曹達を溶解せしめたるものを、火にかけると、水は吾人の手に、やゝ熱きを感じる程の溫度で沸騰する。この湯を飲まうが、手に注がうが、火傷を起す譯はないのである。安心してやつて見るがよい。

第十章　探湯法

第九章に述べた所は、誠に子供だましであるが、深湯法なるものは、古來我が國に存し、事の正邪善惡を、識別する唯一の方法とされたのである。併し此の立場から考へると、催眠心理に依つて、觀念の力から說明され得るのであるが、道人は、

眞修養によつて、何人もこの域に到達し得るものなることを、高唱して止まない。

古來所謂探湯法なるものは、熱湯の中に手を入れて見ると、正善な人は火傷をせぬが、邪惡の人は直ちに火傷をすると云ふのである。

此現象を心靈上から見ると、正善の人は火傷せないといふ自信があり、少しも恐怖せないので、肉體を支配する强大なる精神力、靈力の加はるのと、又科學上からは、皮膚の上面に蒸汽の薄膜を生ずる關係に因るのである。

沸煮せる鍋の中にツマミヤスキ物を入れ、腹力の充實して、全身に氣のみちたる時、『曳』と氣合を發すると共に、湯中の物を把み出すべきである。

此方式を、幾度も〳〵練習してゐる中に、全く容易に出來る樣になるのである。

先年淺草邊へ現はれた、墓仙こと片田源七なる老人は、別に他に何等の修養もなく、多年の間火燒きをして、火の上を通ることになれたるため、アレ程容易に猛火の中を通り得る樣になつたのに見て、上說練習法によりて、探湯法の至域に通じ得る望に、光がみちて來たことを考へられるのである。

第十一章　鉛の熱湯中に手を入るゝこと

別に斯く題を設けると、誠にことごとしく聞えるが、鐵火を扱き得ると同じ理由で、容易に誰にも出來る譯である。併し入れると言ふと、餘程むづかしいが、鉛を熔かしたものを、手刀で切るつもりでやればまいのである。

前章に於ける普通の水を、沸煮したものも、手刀で切れる譯で、前章に說く筈であつたのだが、熱湯は十二分に氣合の練習が出來てないために、呼吸のうまく計れないものが、熱湯を切ると、其處らにたゝき散らかすから、故意と書かずに置いたのである。鉛其の他の金屬を熔かしたものは、カナリ下手な手附でやつても、決して飛沫の飛散ると言ふことはないから、安心してやるがよい。

注意　鐵火しごきの章に述べたところを、參照せよ。何等變つたところはない。

第十二章　刀の刄渡り法

研ぎ澄した刀の刄を、何の恐れ氣もなく、ドン〳〵其の上に上がつたり、指で刀の背と、刄とをツカミ、刀の重りで下にすべらせたり、刄を頬に着けておきながら刀を引いたりなどすることは、古來の行者のやり來つた處である。

其の法式も、可なり多い樣であるが、其の一つの方法を、左に書いて見よう。

先づ第一に清水を以つて身を淨め、鹽を四方に向つて撒いて之を淨め、九字の秘法を修し、左の歌を誦す。

不思議さよ、墨繪にかきし松風の、
音を聽く心、切れど切られず。

次いでアビラ、ウンケン、ソワカと三唱。之によつて刄の切る力は、止めしめられるとしてある。

夫れから、又切れる樣にするためには、

すみのえの、松風の音をきくこゝろ、
切れと切らぬは、太刀の德なり。

此の歌を唱へ、アビラ、ウンケン、ソワカを三唱して、太刀を小振しながら『吽』と氣合を掛けることになつてゐる。併しながら、予の多年の經驗に依れば、之を決して斯樣な秘呪に、微妙な力を包藏してゐるためではない。成程右の歌は、二種ともに、深甚微妙の禪味を持つてゐるには相違ないが、二三予の知り合の行者達の實驗に徵しても、秘呪秘法を修する必要はない。唯虛心、淡壞何んとも思はず、平氣に刄の上に乘れば、夫れでよいのである。唯彼等行者なる者は、多年の間、秘法秘呪の妙力に依るものと、幼少の時から考へ行ひ來つたために、俄かに之を排しては所謂虛心、淡懷、何物をも恐れず、何事をも考へないと云ふ譯に行かないから、因習的に行つてゐるに過ぎないのである。

注意　(1)刄は雙刄のものがよい。片刄のものはとかく、失敗し易い樣である。(2)ねた刄を研いだ刄物も、とかくすると失敗し易いから、避けるがよい。(3)普通大抵の家に藏してある、刀劍なればそれでよい。刄の上には、しづかに上つて、辷らぬ樣にすることが第一肝要な注意である。(4)古來の行者は、婦人のサワリなどを、深く忌む樣であるが、決して差支はない。(5)都下のある有名な氣合術の先生が、矢張り不死身の德の例證として、研ぎすました刀の刄を頰にあてて刀をひき、皮に赤き痕を生ずるも、切れないのを示して得々としてゐる樣であるが、之は一つの手品である。だまされぬ樣に、こゝに種明しをする。

(イ)頰に刄を當てたる時、辷らぬ樣に注意して、強く押へ、(ロ)力を拔いて、輕く刄を頰の上を辷らせる。斯うすると、赤い眞赤な刄痕を殘して、刄は頰を辷りながら、決して切れないのである。(6)之も都下の有名な香具師が、刄に油を塗つて、夫れで刄の切味がとまる由を示してゐるが、之も刀の持ち方による

のである。別に油の德ではない。

第十三章　堅炭の火を渡る秘法

第三章に於いては、古來傳はる所に從つて、所謂火渡り護摩の法を詳述したが、爰には吾人獨特の火渡法を述べることにする。

先づ堅火を二三尺の幅に、一間半から二間の長さに積み、之に火を點じ、盛んに之を煽り、萬遍なく火の起りて、全部の炭が眞紅の色になつた時、一喝の氣合と共に、第三章に示したる所に從つて、之を渡るのである。

此の法は、何等第三章の夫れと異なる所ない樣に見えるが、所謂行者なる者の、斷じて行ふことを得ない處なのである。

注意　(1)第三章の注意をすべてこゝに引用する。(2)炭の悉くが、眞赤になるを要する。尠くとも渡るべき場所に、黑き半點火の炭のなきを必要とする。(3)充分に

火の起りたる後、板の如きものを以て、火を押へ、火面に凹凸のなき樣にすることは、至要なことである。第三章の注意にこれを缺いてあるが、彼の塲合にも、此の注意を拂ふことは、誠によき事である。(4)渡るには、オズ〳〵してはいけない。思ひきつて渡ると共に、足はやゝ叩きつけ氣味、即ち馬脚式に渡ることに注意するがよい。

斯う書いてしまうと、餘りに此の篇はアッケない樣であるが、予は妄りに神怪を說いて、世を欺くを好まないのである。全く赤裸々なる所に、眞の潛んでゐることを、諸君が見出して、述べてあるまゝに行ひ、次第に深い研鑽と、工夫を積まれんことを、切に祈つてやまないのである。

中篇　不壞金剛篇

斯の篇に說く所は、上篇よりも更に多くの練磨を要する。全く上篇に說いた所は予の注意の許に行へば、神妙の域には勿論至らないが、一見世俗の凡庸者を、驚かすに足る事が出來るのであるが、斯の篇の所述の、修養の如何に依つて、結果の上に非常の差異を生ずる。自然初學未修養の者は、難しい事もあるであらうが、夫れだけ眼前に修養の程度を、實證的に見はされる譯であるから、修養練磨に、精の出る事と信ずるのである。どうか別篇に、示す所に依つて、充分の鍛練をして、至域に達せちれんことを、切望して止まないのである。

第一章　一人よく數人を引く金剛力のこと

一人よく數人、いや數十人を引くと言へば、如何にも不思議に聞えるが、其の不思議が何の不思議もなく、誰にも行へるのであるから愈々不可思議千萬ではないか。

此の不思議な法は、次の樣な方式でやるのである。

先づ術者があつて、被術者の二三歩前に直立する。被術者は、唯だ丹田に力を藏

し、全身呼吸をなして、佇立するのである。被術者の後には、幾人でもよい、出來るだけ多くの人が、順次に腰を抱いて、前の人の前進を阻止する心算で、頑張つてゐるのである。準備は之で出來た。被術者の後に續く幾人幾十人は、皆一齊に被術者一人を、前進せしめまいとくひとめる。被術者は、虛心平氣で衝ッ立ッタまゝ、全身の力を丹田に込める。出來るなれば、次ぎに說く所の覺醒强直の狀態になり、術者の心力の引くにまかせて、全身を次第に前に倒ふす。術者は『曳』と氣分を掛けながら、强大な心力を喚起して、被術者を引くのである。斯くすること、暫時にして全部の人が、次第に前から〳〵と前進し、初めるのを見るのである。

注意　(1)熟練すれば別に術者を要こない。被術者の位置にゐる人が、術者を心想の上に假念すればよい。(2)被術者になる人が、全身を一直線にすることを、忘れてはいけない。(3)被術者は、決してアセラズニ、よく落ちついて、靜かに前にたふれ、後の人の動き初めたのを感じてから、己が步を起すべきである。

(4)被術者を抱いてゐる人は、イキナリ後に引いてはイケない。唯だ被術者の前進を、クヒトメル心算で、抱きとめるのである。

第二章　小指にて鐵棒を曲げること

坊間、所謂香具師なる者が、柔道着を着し、汗みどろになつて、氣合術の本を賣ると稱して、此の法を修してゐる。大方の諸子は、既に承知のことと思ふが、順序として左に其の方法を說明して置く。

二分乃至二分五厘の直徑を、限度とする程の太さの鐵棒を、左手に握り（右手利きの方）、右手の小指を、棒の他端に當て、徐ろに兩手に力を入れて、兩手と鐵棒の位置を定め、次ぎに腹力を充滿せしめ、精神を統一して、手に鐵棒のあることを忘れ、唯線香の如きもの、飴の棒の如きものを持てりと觀念し、其の觀念の充分に出來たる刹那に、『曳』と一喝し、左手の小手首を、前方にかへし、右の手を、棒を曲

げる樣に引くべし。

注意　(1)棒の太さは、各人の持ち力の大小に比例すべきものなり。唯此の方法の妙味は、普通にては曲げ得ぬ程度の太さを、容易に曲げ得るに在り。上述の太さは、日本人の平均體力を、基準にしたものである。(2)棒は普通の鍛鐵なるを要する。鑄鐵、鋼鐵の類はよろこぶ可きものではない。彼の坊間に氣合士の鐵棒は、細きが上に、燒きをもどしたるものにて、殆んど何等の方法を講ずることなく、誰にも容易に曲げ得る程度のものである。(3)長さは、扱ひ得る限り長き方が、容易に曲げ得るのである。

第三章　指頭及び腕に金剛力を表はす法

拇指と、人指とを接して、圓き環を作り、充分腹力を充實せしめたる後、全身の力を指頭に集めたる後は、一切を忘れ、尠くも自己が指にて、環を作り居ることにつきては、無關心の狀態となりて、誰人かにこの指環を引き放たしむるに、遂に引き放ち得ないのである。此の際引き放たんとする力に、抵抗せんとするは、却つて容易に引き放たれるものである。

腕引の法は、よく角力連が力競べの餘興に行ふ所であるが、臂の曲りに手拭の類を挾み、手掌を以つて頭を抱へ、手拭の引きくらをするのである。此の際矢張り、腹力を充實し、全身の力を一旦臂に集めて、グット手拭を挾みて後は、一切之を忘れたる樣な狀態となり、身體を反對の方面に曲げて、臂を上げながら引けば、我に倍する敵に、容易に勝ち得るのである。

左右の臂にバンドを掛け、余は合掌し、バンドの兩端に、各〻二三人の人をかからしめて引かしむるに、若し彼にして別篇に說ける所に從つて、腹力を養ひ居らば、是等合計の五人の力に抗し得て、尙ほ餘裕があるのである。

此の際注意すべきことは、腹力を充實すること、合掌したる所に、全身の力を込

め、然かる後一切を忘れてゐればよいのである。

此の外首引き、指相撲、棒押し、腕相撲等、あらゆる力競べに於いて、少しく工夫を用ふるならば、常に己に倍する敵を、制することは容易である。

第四章　咽喉にて鐵棒を曲げる法

由來咽喉は、何人も非常に抵抗力の弱き、最も恐るべき急所と考へてゐる。成る程如何にも、急所には相違ないが、一面人間の身體は、決してそんなに意氣地なく出來てゐるものではない。人間の身體には、古來柔術家に依つて研究された、所謂急所なるものは無數にある。殆んど手のふるゝ所、皆之れ急所であると云つても、敢て過言ではない。夫れ程に多くの急所を有しながら、人間が無事に、平穩に生きて行ける事實に鑑みても、急所は方法を以つて當てる外、そんなに容易に、人間の生命をおびやかすものではない。大抵の所は、なか〳〵、打つても、叩いても、容易にマイルものでない。先づこの點を充分に承知した後、更に徐かに、自己の咽喉を押へて見るがよい。押へ樣によつては、輕くムセルが、之に驚かないで、尙々徐かに、次第に力を入れて押して見ると、意外に其の力の強いのに驚く筈である。特に所謂ノドボトケより上の部の力強いことに就いては、まだ經驗しない人には、全く想像もつかない程、そんなに力強いものである。此の安心と、落付きの出來た時に、第二章に述べた、鐵棒又は之より、更に五厘位太い鐵棒をとり、靜かにノドに當てがひ、腹力の充實、精神の統一型の如くし、然かる後、一喝の氣合と共に、曲ければよいのである。

注意　初心の內は、ノドボトケより上に當てるがよいので、兩手で棒を押し上げる心地よりも、咽喉で棒を押し下げる氣持でやるがよい。

第五章　覺醒强直狀態

由來强直狀態と言ふのは、催眠術家の初めて使用した言葉であつて、第二度の催眠狀態に於いて、一部肉體、又は全部肉體の筋肉が、一時硬化して、恰も鐵棒の如くなる狀態を言ふのである。併し此の狀態は、決して催眠術に依りて得られるのみでなく、寧ろ我が氣合術によれば、更に容易に、且つ好結果に、此の狀態を得る事が出來るのである。催眠術に於いて、此の狀態を作るには、可なりの手數と、時間とを要し、其の上、時に被術者の內臟を强直硬化せしめ、死亡の危險を冒かすことがあるのであるが、我が氣合術より得たものには、この虞が全然ないのである。

此の方法は、自分が自分でやる場合と、他人に對してやる場合とがある。自分でやるには、先づ型の如く腹力を充分に整へ、一部强直なれば、其の部に全身の力を集めたる後、一切を忘れてしまへばよいのである。又若し全身强直をやるとなれば、腹力の充實を圖つたまゝ、其のまゝ忘我の狀態になれば、それでよいのである。

今迄にも、所々に我を忘れると云つた意味なことを書いたが、是を示すには、別にむつかしいことはないのである。よく熟練したものは、唯『曳』の一喝で、忘我の狀態となり得べく、未だ充分に練達してゐないものでも、二喝三喝乃至五六喝を用ふるならば、實に容易に忘我狀態となるものである。

右全身强直が、果してうまくいつたかどうかを試み、表示するためには、頭脚の二ケ所のみを支へて、體を仰臥させることに依ることになつてゐる。

右の狀態が、催眠術の夫れと異つてゐる點は、强直してゐる人が、平生と少しも變らぬ心理狀態にあることゝ、筋肉があの時程に硬化しないで、よく其の狀態を呈し得るの二點にある。

若し他人をして、此の狀態を作らしめむとするには、別篇に示すところによつて充分に心身を鍛錬した後でなくては駄目である。換言すれば、自己の精神を、よく

統一し得、以つて之を他に遷し得る底の修養を必要とし、腹力の充分なる充實によつて、何ものにも打ち克ち得る底の自信を要する。此の二要件さへ足りてゐるならば、別に何等の方法を講ずることなく、容易になし得ることを、自得する。

然しながら、強いて此の狀態を作りたいならば、完全なものは望み得ないであらうけれども、近似のことは出來得るのである。其の方法としては、先づ被術者を仰臥せしめて、頭脚の二ヶ所を支へ、術者は片手又は兩手を以て、臀部を支へたる後自己の腹力の充實を計り、氣合の充分に籠つた時、『曳』と一喝、又一喝すると、遂に手の支を取りのけても、決して姿勢を崩さないのである。

第六章　腹力金剛力法

第五章に述べた、自己覺醒强直狀態の自由に、且つ完全に取れる樣になつたならば、此の章に述べる所の法も、亦容易に行ひ得るのである。

先づ第一に試む可きことは、床上に仰臥し、腹力充實を行ひたる後、全身を柔らかくし、道家の所謂軟蘇觀を起して、充分全身の肉のとゞこほりなく、柔くなつた時、腹部の尤も柔かなる部分に、靜かに人を一人載せて見るのである。而して徐かに、腹力の充實を圖るならば、左したる苦痛を感ずることもなく、腹上の人は、靜かに何程か、全身を高く押上げらるゝのである。

右の試が了り、且つ容易であるならば、更に右と同じ心持ちと、同じ注意の下に二人の人を載せることを試むべきである。之も亦たやすく行ひ得たならば、更に三人にし、四人にして試む可きである。

吾人の實驗によると、相當に練熟した人は、大抵自己と同じ重量の人を、四人位までは、平氣でのせることが出來る樣である。

注意　腹の上に上る人は、靜かに上り、始終腹上に、靜かに位置を保つことに、心掛けねばならぬ。

以上は床上に於いて之を行ふのであるが、首尾よく行ひ得た後は、第五章に示した所の如く、頭脚のみを支へて、而して此實驗をなすことが出來るのである。何等の疑念も、狐疑もすることはない。唯信じて行へば、行ひ得るのである。但だ上るに場所がないから、自然或人は腹に、或人は胸に、或人は太腿部に、立つ可く餘儀ないと思ふ。

第七章　腹上にて餅を搗く法

腹上にて餅を搗かせ、某名力士が其のヒイキの客に、配つたと云ふことは、誠に珍らしい一つ話の樣に傳へられてゐるが、腹上で餅を搗く位は、氣合の修業をした者には、全く容易に出來るのである。

其の方法としては、腹力の充實後、忘我の狀態となりたる後、腹上に臼を載せ、何人かをして搗かしむれば、それでよいのである。何等秘傳を要さないのである。

注意　(1)右の餅搗を行はうとするには、尠くも第六章の法を修して、三人を載せ得る程度に、心身の鍛錬されてゐる人でなくてはならない。(2)臼はなるたけ重きを、必要とするのである。決して拾貫以下の臼を以て、此の實驗をなすべきではない。輕きときは危險極まるのである。(3)心が臼にとらはれ、杵にとらはれてはならない。決して腹部に、又全部に力を入れて、コルべきではない。腹部に力を入れることは、却つて失敗の原因と考へねばならぬ。

第八章　玄翁にて腹上の三四十貫の青石を割らしむ法

只題目さへ掲げれば、直に其の法は會得される程に、そんなに容易な法である。前述の修養と、實驗を經た方には、唯青石の三四十貫もあるものを、腹上に載せ人をして玄翁を以つて打ち割らしむればよいのである。

注意　(1)石は可及的重い方が、却つて樂であり、而も他に對して、見榮えのあるものである。(2)大抵は心配ないが、種仕掛のないことを示すために、裸で之を行ふことになつてゐるが。石が二つに、三つに碎けた際、わるくすると、其の小破片に依つて、皮を傷けることがないとも限らないから、豫め之に備へるために、腹と石との間に、厚い板など挾むがよい。

前章に書いた所を、其のまゝ腹の上でなく、胸で、又は横腹等で行ふものもあるが、要は全く同じである。

本篇及前篇等に說く所、誠に奇に走り、實に篇名の如く、神奇をてらふに似たりと雖も、述者の意は決して此所に存するにはあらずして余は之に依つて、世を欺くの具に供せるものあるが故に、諸子をして之に備へしむると共に、一面諸子の心身を、充分に鍛錬せしめ置き、對自己、對他人の病氣治療に、奏効の容易、確實を期せんがために他ならぬ。

下篇にとく所、聊か餘興じみたるも亦之に依つて先づ世人に、偉大なる能力を有するものなりとの暗示を與へ、斯くて治療及び惡癖矯正に効果あらしめんとするにあり。

下篇　雜錄篇

第一章　面上に落下し來る石を杖にて必ず受け止むる法

小石を拋り上げて、之を竿杖の類にて受け止むるに、百發百中、遂に一度も仕損ずることなき巧妙さを嘆ずるものを、よく緣日などにて見るのであるが、之は少しも不思議はないのである。持てる竿、又は杖を鼻梁に添へて持ち、落ち來る石の眞

下に立ちて、之お受け止むれば夫れでよいのである。初めの者には、時に仕損じがあるかもしれないが、三度五度と練習を積むに從つて、實に百發百中、千發千中、一の失敗もなき面白さを味ひ得るのである。

第二章　黑白碁の打ち分け

有名なる劍客、佐々木巖柳が、己に向つて投げつける碁石を、悉く受けとめしのみか、黑白を左右にうちわけた話は、宮本武藏が、同人に對する復讐美譚と共に、武人の間に三嘆措かざる不朽の名譽とされてゐるのであるが、若し別章所載の六法に依つて、充分の練習をして、眼と精神が練熟されたならば、必ずや、巖柳を待たないで、誰人にも容易に出來る、藝當なのではあるまいか。

第三章　兩端を一枚の紙にて吊したる青竹を打折りて紙のきれざる法

右の法もよく祭り、緣日等に於いて、香具師に依つて行はれ、餘り事新しいことではないが、尙不思議がる方も多いから、序ながら筆にすることにしました。

方法としては、青竹又は木の枝の類の兩端を、細き〳〵紙捻、又は細き絲、又は一枚の稍强靭なる紙に、穴を穿ちたるものにて吊し、木刀或は刀を以つて、吊されたるものの眞中を打ち切れば、紙又は絲は切れることなくして、枝、竹は折られるのである。

注意　(1)吊されたる枝、又は竹の太さ、强靭の度は、其の人の技量と、比例すべきである。彼の香具師の用ふるものは、一年竹である。(2)以上の枝又は竹の眞中に、豫め目印を附けて置いて、此の所を打たねば駄目である。何れか、打つ塲所が一方に偏すると、吊りは、必ず其の偏した方が切れるに定まつてゐる。

(3)打つことは出來るだけ、正確に急激でなくてはならない。此の打ち方が緩漫であれば、あるだけ吊の方が切れ易くなるのである。而して急激に、正確に打つためには、打つこと夫れ自身の練習も必要であるが、充分腹力の充實を圖り忘我の狀態で一氣に打ち切るべきである。此の呼吸さへ充分に出來るなれば、竹の太さも、問題でなく、三年竹であらうが、五年竹であらうが、全く問題ではないのである。

古來劍士の間に傳はつてゐる、カメワリの極意なるものも、畢竟は腹力充實、氣海に充滿した英氣が、一氣に發するを言ふのに外ならぬのである。

彼の柳生の三男が、修業中練習したと云ふ、流れ切り、瀑布の水切の極意なるものも、對象に剛柔の差はあるが、呼吸は全く同一のものである。

吊に用ふる紙片に代ゆるに、水を滿てたる茶碗を以て、其の上に竹を置きて打ち切るも、矢張り同理であつて、水は一滴もこぼれることはないのである。

第四章　金魚に氣合をかける法

氣合を他の動物に掛ける第一歩として、金魚を其の對象とするのが尤も簡便な樣である。

それには、先づ鉢に三四匹の金魚を取り來りて、我が前に置き、己が姿勢をとゝのへたる後、充分に腹力の充實を圖り、氣海に英氣の充滿するを待ち、一氣に之を發して、氣合を掛ければよいのである。

氣合を謀り、氣の充實を圖る間、金魚に對して精氣の集注することを忘れてはいけない。精氣の集注のよくされたもの程、早く氣合にかゝる樣である。

注意　氣合がかゝりたりや否は、金魚の態度を見れば明かである。若しかゝりたりとすれば、今迄元氣に活動せしものが、急に鰭を收め、靜に鉢底に下りて生死が明らかならざる程になるを見るべし。

此の練習を積むに隨つて、他の動物にかくる工合も、自得されるに至るのである。

第五章　雞に氣合をかける法

第一法　鷄を捉へ來り、之を仰臥せしめ、靜かに胸毛をなせ下げ、雞の氣の沈靜したる頃を見計ひ、靜かに強き氣合を掛くる時は、雞は冥目して、靜かに眠るを見るのである。

注意　(1)他人の前に之を行ふ時の如きは、先づ氣合をかけんとする前、雞の氣を荒くしてさわがさしめる樣に、仕向けることが大切である。(2)イザかける準備として、抱き上げては脊を靜かに撫せ、雞の氣を落付かしめ、其の落付くを待ちて仰臥せしめ、更に前述の方法をとるべきである。

覺まさしめるには、何等手をふれることを必要としない。强烈なる氣合一喝をくれゝば、夫れで澤山である。萬一、一喝で覺めない時は、二喝、三喝をくれゝばよい。

第三法　之は催眠家の常用方法であるが、氣を以て眠らせる點は、同じであるから書いて置く、夫れは、前記の如くさわぐ雞を捉へ來り、脊を撫でて氣を靜めしめ首と兩足を伸ばす樣にして、體を床に壓しつけ、兩眼の所より前方に、白色の線を引き、靜かに氣合をかけると、雞は立所にねむるのである。

覺ますには、やはり、單なる喝にて足りるのである。

第三法　前述の如く、躁げる雞を捉へ來り、之を椅子の如きものの上に止まらせ體を靜に押へ、脊をなせ、氣を靜かにせしめ、雞の態度をして、普通の眠りの狀態をとらしめたる後、靜かに且つ力のこもれる氣合をかけると、雞は其のまゝ眠る。

覺ます法は、前記の方法と變りはない。

第六章　鳥を集散せしむる法

世界無錢旅行を遂げ、途中土耳古で軍事探偵と間違へられ、死刑の宣告迄もうけたと云ふ、冒險旅行家であり、且つ朝鮮、支那、ビルマ、印度に於いても、諸種の難行苦行をしたと云ふ精神家である、吳賃將軍、中村泰昌氏が、最も得意に此の法を修するのであつて、嘗つては江間俊一氏と、諸種靈理、靈學上の話の末、實驗と云ふ段になり、上野の森の鳥を一所に集めて、ヤカマシク鳴かせたことは、東都に於ける靈學者、靈能者間に、公知の事實なのである。

事實を話に聞けば、誠に神怪な感がするのであるが、決して何等の神怪、奇異は其の間に介在しないのである。要は多年の山居の間に、充分に禽獸の鳴き聲を研究し、巧妙に之を眞似、以つて彼等をして、彼等の仲間間に存する、不文の約束に從つて、集散せしめるにすぎないのである。

彼の小鳥とり、蟲とりの人達が、笛によつて巧に彼等の聲にまねて、彼等を呼び出して、捕ふることに考へ至つたならば、思ひ半に過ぐるの感があるのである。

第七章　自働書記

自働書記と云ふのは、原名プランセットの譯語である。今から十餘年前、亞米利加から舶來して、一時非常な大流行を極めたもので、一言にして言へば、心理學、靈理學の實驗用具なのである。夫れを、夫等に對して、餘り多くの理解を有たぬ者までが、流行を追ふて、猫も杓子も盛にやつたため、果ては所期の十分の一の結果をも見ないために、遂に今日すたれてしまつたのであるが、決して見捨つ可き者でなく、充分の研究をとぐ可きものであるから、構造と用法を示して、諸子の研鑽の一資に供したいと考へるのである。

構造は、吾人の手掌を載するに足る程の、大さのパート形の木板で、厚さ三四分

位のものの尖端の方に穴を穿ち、鉛筆を保持し得る樣に裝置し、ハートの兩心耳に相當する所に、縱橫に廻轉するに都合よき樣に、作られたる車を裝置すれば、夫れでよいのである。此の車の代りに、極簡單に造れば、疊表を止める鋲の如き、背の滑らかなるものを打ちつけてもよい。

第一、使用。右の如くに作られたるブランセットを、白紙の上に置き、ブランセットの上に、右手或は兩手を安んじ、冥目、端座、無念無想の境に入れば、心にとはんとする所のものを藏するものは、暫くにして、ブ氏の活動するあるを見るのである。かくてブ氏の活動するがまゝにまかせて、手をひきずられ行く中に、ブ氏は何時しか活動を停止する。此の時に於いて、開目し、ブ氏が一氣に一筆書きにしたる所を、注意して見れば、或は右文字に、或は左文字に、或は異國語に、或は繪畫に依つて、其の問に對する答を、記してあると稱せられてゐる。併しながら多數の實驗の結果によると、其の實驗場にゐる人々の集合心理の作用に依るか、將たブ氏に手を置きたる人の精神統一の狀態の如何によるかは、不明でめるが、ブ氏が全然働かないこともあれば、答が問に對しては、餘りにトンチンカンなこともあり、全く無意義なこともあり、或は全く不明なこともあると言はれてゐる。

併し、また正確に明瞭に答へ、而も的中した事例も尠くないのである。予の友人中川清風氏の如きは、第二、使用法に依り、極不完全なるブ氏を、使用してよく的確に中つた、幾多の事例を持つ實驗者の一人であつて、ブ氏崇持者の一人である。

第二使用法。此の法は、第一使用法とは、餘程趣を異にするのであつて、ブ氏の上に、右手を安じ、忘我の境になるまで、精神を統一し、所謂無念無想、心は明鏡止水の如くなりたる時、我より心して手を縱橫に働かす。ブ氏は手に從つて縱橫に運動すべし。其運動の盛んなるにつれ、己が問はんと欲したる所に對する答は、觀念の上に顯はれ來るのである。

第八章　狐狗狸術及降神術

自分は前章に於いて、ブランセットの事實に關して記したが、何等原理を說くことをしなかつた。併し、予は全篇を通じて、理論を玩ぶことを避けたから、矢張此所でも之を說明することを止める。此のブランセットと同一原理の上に立つものに所謂狐狗狸術、降神術なるものがある。前者は、三本の細き棒の中程を縛し、之を擴げて足とし、盆を裏返しにして、此の上に被せ、此のダラ〳〵と動き易きものゝ上に、幾人かの手が隻手、又は雙手を載せ、各人が、同一問題に對して、思念しながら冥目し居れば、初め定め置きたる約束に從つて、盆は左轉又は右轉して、其の問を正確に答へるのである。例へば、今來客あり、其の男なりや女なりやを、狐狗狸さんに問はんとするに、男ならば左轉、女ならば右轉と約束し置き、各人冥目思念して、狐狗狸さんの廻轉をまちて、答とするが如きである。

其答のやゝ複雜なるものに至りては、之を分解して然か否かに分ち定て行く。

後者即ち降神術には、所謂巫子なる者を賴み、彼自身が專念祈禱することに依り其の間に忘我脫境の神境に住するに至り、自發的に依賴者の問はんとする所に答ふるか。幾人かの內にて、一人を撰び出し、他の人は之を取りまきて、頻りに經文などよみ立てゝ、一心に祈る內に、何時か中央なる人は、脫塵無我の境に遊ぶに至るのである。此時一同は、經文を止め、夫々各自が問はんとする所を尋ぬるに、地の東西、時の過去、現在、未來のきらひなく、輕快に應答を與へるのである。但し時に其の答の要領を得ざることあるのは、第七章に述べた所の如くである。

後の方法は、法華の行者、特に中山派の者などが、好んで用ゐ、以て佛經讚嘆の資としてゐるのであるが、必ずしも經文の力をかる必要はない、『曳、々、々』と氣合を掛け通すも可なり。勅語を拜讀するも可なり。『呵、江、以、宇』何れの氣合を連續的にかけるも可なりである。

露光量違いの為重複撮影

第九章　靈子板

靈子板なるものは、田中守平氏の考案になるもので、同氏の所定は、檜材の板を縦七寸、横四寸、厚さ五分として、兩面を最も滑かに削り、板の周圍を半圓形に爲し、且つ周角の全部に面を取つたもので、兩面に澁、ワニス、漆の類を塗ると否とは、各人の好みにまかせてあるが、白木のまゝを、寧ろよろこんでゐる樣である。

同氏は此の板を、所謂靈子潛動作用を修得し、治病能力を增進するの具に供してゐる。此の實驗をなし、練習を積むことに依つて、所謂潛動作用の體得よりも、脫境、超我、心身合一の境に入りやすからしめる。尠くとも兎かく散亂、散漫になり易き氣力をまとめる上に、非常に興味ある練習方法なる點に於いて之を採り、心力氣力をまとめる力ある點に於いて、治病能力增進法の一として讃し、其の形式の奇なる點に於いて、此の篇の中に入れたのである。（第七神奇篇終）

大正十二年五月五日印刷
大正十二年五月十日發行
大正十三年十二月二十日改訂三版
昭和三年五月廿日改訂四版

編輯兼發行人　桂六十郎
發行人　東京府下池袋驛郵便局管内高田町雑司ヶ谷六百十九番地　高橋利惣次
印刷人　東京市小石川區指ヶ谷町十二番地　高正堂印刷所
印刷所　東京市小石川區指ヶ谷町十二番地

非賣品

不許複製

發行所　東京市外高田町雑司ヶ谷九四九番地
大日本靈學通信學校
振替東京五八四七九番

318
267

露光量違いの為重複撮影

第九章　靈子板

靈子板なるものは、田中守平氏の考案になるもので、同氏の所定は、檜材の板を縦七寸、横四寸、厚さ五分として、兩面を最も滑かに削り、板の周圍を半圓形に爲し、且つ周角の全部に面を取つたもので、兩面に澁、ワニス、漆の類を塗ると否とは、各人の好みにまかせてあるが、白木のまゝを、寧ろよろこんでゐる樣である。

同氏は此の板を、所謂靈子潛動作用を修得し、治病能力を增進するの具に供してゐる。此の實驗をなし、練習を積むことに依つて、所謂潛動作用の體得よりも、脫境、超我、心身合一の境に入りやすからしめる。尠くとも兎かく散亂、散漫になり易き氣力をまとめる上に、非常に興味ある練習方法なる點に於いて之を採り、心力氣力をまとめる力ある點に於いて、治病能力增進法の一として讃し、其の形式の奇なる點に於いて、此の篇の中に入れたのである。（第七神奇篇終）

318
267

大正十二年五月五日印刷
大正十二年五月十日發行
大正十三年十二月二十日改訂三版
昭和三年五月廿日改訂四版

非賣品

編輯兼發行人　桂　六十郎

印刷人　東京府下北豐島郡高田町雜司ヶ谷六百十九番地　高橋利惣次

印刷所　東京市小石川區指ヶ谷町十二番地　高正堂印刷所　東京市小石川區指ヶ谷町十二番地

發行所　東京市外高田町雜司ヶ谷九四九番地　大日本靈學通信學校　振替東京五八四七九番

不許複製

爾に還れ

爾は陛下の赤子なり
爾は自然の愛兒なり
日と氣と土とに親みて
爾の自然に還れかし

終